

負けない嫁

鹿島孝一

講談社

著者略歴

鹿島孝二（かしま こうじ）

明治38年千葉県に生まれる。直ぐ上京。下谷稲荷町で育った下町っ子。大正12年、早稲田大学へ入学の年に関東大震災で家を焼かれ、下町から離れる。早稲田大学卒業後、直ちに文筆生活に入るもしばらくの間は、苦しい生活を余儀なくされる。やがてユーモア小説作家として一人前に扱われるようになる。

太平洋戦争には、海軍報道班員として徴用され、南方海域に従軍する。戦後、神奈川県平塚市に居を移し、現在、日本文芸家協会理事、日本文芸著作権保護同盟理事。

負けない嫁

昭和五十九年七月十八日 第一刷発行

定価 一三〇〇円

著者 鹿島孝二

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―二―二二
郵便番号 一―二
電話 東京〇三―九四五―一―二（大代表）
振替 東京八―三九三〇

編集 株式会社第一出版センター

東京都新宿区新小川町九―二五 日商ビル
郵便番号 一六二

電話 東京〇三―二三五―三〇五一

印刷所 星野精版印刷株式会社

製本所 大製株式会社

©鹿島孝二 一九八四 Printed in Japan

ISBN 4-06-201347-9 (0) (セ)

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えます。

負けない嫁

負けない嫁

目

次

ハナの校長	6
ひたむきに	20
人事課長の眼力	32
父と子	45
道連れ	58
負けない嫁	73
二度あることは	86
磨りガラス	100
男女平等	113
名菓桜吹雪	127
入り婿さん	141
脱水症状	153
粗大ゴミ	165

自転車と私……………178

飛驒高山行……………192

冷血動物……………206

ピンとキリ……………220

珍報恩記……………232

あとがき……………246

ハナの校長

あれは一昨年の七月の終りの頃だった。湘南市駅の改札口から吐き出される降車客の中に、大里氏の姿を見かけた。私は駅ビル内の洋品店へ買物に行くところだったが、大里氏を見たので声をかけた。

「大里さん、こんにちは」

大里氏は振り返って、

「やあ、お散歩ですか」

氏が登山服、登山帽、リュックを背負っていたので、

「山へお出かけでしたか」

「富士へ行って来ました」

「富士？」

意外な気がした。氏はベテランの登山家である。山登りだけが趣味みたいに、休日には必ず出かけ、それも独り歩きが好きで、七十歳の今日までに国内のめばしい山はあらかた踏破した、と氏自身の口から聞いたことがある。その人がなぜ今更富士へ行ったのか？

「いかがです、お茶でも呑みませんか」

誘って駅ビル内の喫茶室へ入った。氏がリュックを下ろして腰かけるのを待って、

「富士は初めてじゃないんでしょう？」

ときいてみた。すると、

「初めてです」

「ありふれた山だから登らなかつたんですか」

「そういうわけじゃありません。富士は遠見の美しい山です。そういう山はいざ登ってみると存外つまらないものです。そう思って今まで敬遠していたんです」

「それがどうして登る気になったのですか」

「七十歳になったからです。外見の美しい女に近よるな、というのが私の青年時代からの人生訓でした。山も同じことだと思っていたんですが、しかし七十歳ともなれば迷わされることもあるまいと考え直したんです——」

大里氏は永く教職にあった人である。旧制の東京高等師範学校を卒業して神奈川県立中学校に奉職し、戦前から戦後しばらくまで中学教員を勤め、新制高校が発足と同時にそちらの教諭となり、十年前に退職したときには校長であつた。硬派であるという評判だった。体罰を奨励したらしい。怠け生徒にはクドクドと説諭するよりは一発ガンとピンを食わせた方がいい、自分が率先して見本を示します、とPTAの総会で言明したそうである。

公立高校長を退職後、私立高校の非常勤講師を勤めていたが、三年前に夫人に亡くなられたのを機に、教壇から離れた。年金がはいるから生活は不安は無さそうだ。息子も娘も結婚して別居しているので、一人暮らしになったわけで、何かと不自由ではないかと同情したが、根が山岳マンだから、飯盒炊爨はお手のものだし、身のまわりのことも自分でし馴れているから全然苦にならないです、とのことだった。中肉中背、七十歳にしてなお背筋がピンと張り、病菌など入りこむ隙が無さそうな健康体に見える。

「登ってみて富士の感じは如何でした？」

「やっぱり遠望だけの山で、つまらんです」

「しかし、来迎は絶景でしょう？」

「あの程度の景観ならどこにもあります。結局アマチュアが喜ぶ山に過ぎませんなあ」

さて、その後間もなくだが、大里氏の艶聞が耳に入った。若い女性とアベックであちこち歩いている。その様子がいともねんごろだという噂なのである。とるに足りぬデマだろうと私は一笑に附していたのだが、氏と同僚であった菅原氏も言うのであった。菅原氏はデマなど飛ばす軽率な人ではないのだが、こう言った。

「大里君自身の口から聞きました。教育者として妻以外の女性に眼をくれることは絶対許されないと、敵に己れを戒めて来たが、今は教育界から去ったし、妻に亡くなられたし、齢七十にも達したからガールフレンドを作っても身を誤ることはあるまい、なんて涼しい顔をしていました」

「冗談に言ってるんじゃないですか」

「私も初めはそう思ったんですが、しかしこの夏は、七十歳になったからって富士へ行ったでしょう、そして今度は七十になったからってガールフレンドなんて、テストをやってるみたいで、満更冗談でもないらしいです」

「老いらくの恋ってところですか」

「そうとしか思えません——」

真面目居士の菅原氏からこう聞かされてもまだ半信半疑だった私の眼に、大里氏とガールフレンドのアベック姿が留まったのである。ところは歌舞伎座であった。十二月初めに、例年通り湘南市の商店街で歳末大売出しを始め、福引の一等が当たると、歌舞伎座の観劇券がアベックで、しかもお食事券付きだということだった。うちの老妻はまことにクジが弱いのだが、珍しく当たってしまった。妻は、俸夫婦にやろうとしたが、歌舞伎なんて、と若い夫婦は気が進まない様子だった。それで私たち夫婦

が出かけたのだが、歌舞伎座について券を係の女の子に見せて、指定席に案内されると、隣席に大里氏が掛けて居、その向うにガールフレンドが並んでいたのである。

此方もびっくりしたが、大里氏は顔を赤らめて、

「これは意外なところで——奥さんも一緒にしたか」

私が大里氏の隣りにかけ、家内が私の隣りだから、老妻と若きガールフレンドが、老男子二人をはさんで両外側というわけになった。開場前で場内が明るいから、お互いに観察し合える。と言つても、横一文字に並んで腰かけているのだから、じろじろとは見られない。

大里氏は腹をきめたのであるう。

「鹿島先生、ご紹介します」

「はあ」

「此方は木暮道子さんです。私のガールフレンドです」

「鹿島です。此方は愚妻です。よろしく」

「初めまして。木暮道子です——」

三十歳くらいと私は見た。しやつきりとした感じの人である。安物らしくない服が眼についた。茶、白、黒のこまかいプリントのワンピースで、その上に黒の上着を着ているのがお上品ぶっているように印象づけられた。腰かけているのでよく分らないが、丈が高いらしい。

大里氏が私に、

「歌舞伎座へはチョコチョコおいでですか」

「友達とは来ますが、家内同伴は初めてです。商店街の歳暮売出しで券が当たったんで、やって来たんです」

「私たちもそうなんです」

一幕が終るともう食事の時間だった。食券にそう指定されていた。大里氏が、
「食堂はどこでしょうか」

ときくので私が案内役で四人連立って廊下へ出た。階段のところで、何人かの湘南市民に逢った。いずれも歳末売出しの福引に当たったのであろう。そういう人達で食堂は満員だった。でも四人用のテーブルが一つだけ空いていて、そこに掛けることが出来た。此方側に私と家内、向う側に大里氏と道子さん。差向いだから、今度はよく観察できた。

なかなか美人である。目鼻立ちが整っている。それよりも、若いということがやっぱり魅力である。皮膚の張りや艶が老人とは段違いだ。三十歳の女盛り、甚だセックスアピールがある。ちょっと頬に頬を寄せてみたくなった。

食堂から出ると大里氏が、

「先生、お先に失礼します」

道子さんは道子さんで愚妻に別れの挨拶をした。もうお帰りですか、なぜですか、などと追及すべきことでないから、私たちは、失礼しました、とだけ言って二人を見送った。

観覧席へ戻りながら、愚妻が、

「きれいな方ですね」

「うん。あれで幾つくらいかな。三十かな？」

「もうちょっと上じゃないですか」

「そうかな」

「本当に大里さんのガールフレンドですか」

「という紹介だったね、さっき」

「冗談じゃないんでしょうか」

「本物だというもっぱらの評判だよ」

「厭だわ。大里さんはもう七十でしょう」

「ああ」

「みっともないじゃありませんか」

「七十歳になったからこそ、今迄しなかった体験をしてみるんだ、と言ってるそうだ」

「何もそんな体験なんかしなくてもいいのに」

「人さまざまで仕方がないじゃないか」

「今日初めて大里さんの顔をよく見ましたがずいぶん鼻が大きいですね。もともとあんなに大きかったでしょうか」

「そう言われてみると、確かに超大型だな」

「そんなこと言っちゃ失礼ですが、気味がわるいくらい大きいですわ」

「ハナの校長って仇名だったよ」

「あの女の人、結婚したことがあるんでしょうか」

「どうかなあ」

「落着いた態度ですわ」

「三十代になってるからだろう」

こんなことがあったのは一昨年の暮で、明けて去年となって、花のたよりがちらほらし出した三月末、市の教育長から電話が来た。

「お知恵を拝借したいことがありますんで、只今から伺わせていただきますと思いますが、ご都合はいかがでしょうか」

「何の知恵ですか」

「それはお眼にかかった上で——」

ということ、十五、六分すると教育長がやって来た。応接間に通すとニヤニヤ笑って、

「早速ですが、お聞きになりましたかどうかですか、大里先生がご結婚を決意されました」

「あの若い人とですか、三十歳くらいなの？」

「そうです。奥様に亡くなられましたし、お子さん方とは別居で、さぞお寂しいしご不自由だろうとお察しはしていたんですが」

「あの女性はどういう人ですか。どこの生れですか。大里さんとはもう永いつき合いなんでしょうか」

「永くはないようです。去年富士山へおいでになりました時、道連れになったのが初のご対面で、急速に親しくなられたようです」

「富士から帰りの大里さんが駅で降りた時、僕は逢いましたが、お一人で、連れは居ませんでしたか」

「横浜の方ですから、お降りにならなかったのでしょうか」

あの時の大里氏を思い浮かべてみた。機嫌がいい顔つきだったが、格別とも感じなかったのは私の眼力不足だったのだろうか。

「なかなかきれいな人ですね」

「先生お逢いになりましたか」

「暮に歌舞伎座へ行ったら、アベックで来てました。ガールフレンドだと紹介されました」

「ハキハキした人でしたでしょう」

「落着いた人ですね。幾つですか」

「三十三歳です。短大を出てすぐ商事会社に就職して、十二、三年勤続されたそうです」

「それで人怖じしないんですね。結婚は？」

「初婚ということですよ」

「大里さんは七十一歳でしょう。そんな老人のところへよく初婚で来ますね」

「大里先生の魅力でしょう」

「羨ましいですね。結局大里さんは逞ましいんですね。僕なんか、三十二、三の女性と一緒にいる気にはとてもなれませんね。体力的に尻ごみますよ」

「山登りでお鍛えになっているんですね」

ところで、用談に入った。

「お知恵を拝借したいと申上げたのは、こういうことでございます。大里先生のご結婚のご披露宴ですが、ご本人は照れ臭いからやめよう、極近親の者だけで挙式して、それでおしまいにしようとおっしゃるんです。私たち後輩としてはそれでは気が済みません。式の方は近親の方々だけでなさるとしても、披露の祝宴は賑やかに私たちが開いて上げてはという声も出まして、それにはどういう方法がよいか、鹿島先生ならおつき合いが広くて、沢山経験していらっしゃるから、きっと新手を考えて頂けるんじゃないか、そういうことでお伺いしたわけでございます」

「冗談じゃないですよ。新手なんて、僕は知りませんよ」

と断つたが、結局引受けさせられてしまった。とは言っても、すでに教育委員会の方であらましのプランが出来ていて、それへ若干の口添えをすればよいのであった。

うっかり聞き洩らしていたことを、ここでたずねた。

「媒酌はどなたですか」

「それも先生にお願いしたいんです。大里先生からも呉々ものお願いでございます」

私などその任ではありませんと拒みに拒んだが、押しつけられてしまった。教育長が辞去したあ

と、家内に話すと、案の条、

「困りますわ。私出来ませんわ」

と真剣に言われ、無理強いで承知させるのに翌日までかかった。

数日後、大里氏と道子さんがアベックで挨拶に来た。大里氏は少し面はゆげのようだったが、道子さんは平然たるものだった。

「一応これを——」

と大里氏が封筒を差出した。

「何ですか」

「私たちの履歴書です」

新郎新婦の略歴を参会者に紹介するのが、近頃の披露宴での媒酌人の仕事になっているようだから、私もそれをせねばならぬのだろう。念のために封をひらき中味を取出してみると、レターペーパー二枚で、一枚が大里氏の略歴、もう一枚が道子さんのであった。自筆らしいが、きちんとした筆法の楷書だった。

彼女の生地は横浜。父君の名は毅。母堂は律子。

道子さんは長女で、昭和二十年生れ。

小学校から短大まで横浜、そして勤務会社は東京丸の内で十二年勤続となっている。弟妹が一人ずついて、弟は三十歳、鉄鋼会社勤務で結婚して一児の父になっている。妹は二十七歳、同じく結婚している。道子さんだけが婚期が遅かったわけである。

三十三歳になるまで何故結婚しなかったのか。四十過ぎても未婚の女性がふんだんにいる現代だから、三十三歳でミスだからと不思議がる必要はないし、セックスがどうのこうのと疑ぐるのは無礼であろう。